

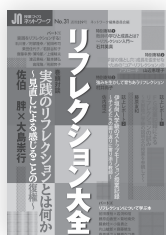
『リフレクション大全』『リフレクション入門』
『小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ 授業づくりの考え方』

 刊行記念セミナー

リフレクション(省察)で 教師は育つ!

トークイベント記録

石川晋・山辺恵理子・渡辺貴裕



● 日時

2019. 3. 28 (木)
14:00 ▶ 15:30

● 場所

紀伊國屋書店 新宿本店
9階イベントスペース



FREE

登壇者紹介

石川晋 (いしかわ・しん)

(特定非営利活動法人 授業づくりネットワーク理事長)

東京都在住。1967年北海道旭川生まれ。元北海道公立中学校国語科教諭。近著は、『リフレクション大全』（共著、学事出版）、『学校とゆるやかに伴走するということ』（フェミックス）、『わたしたちの「撮る教室」』（小寺卓矢氏との共著、学事出版）、『高学年担任必読！小学校で育てる60のチカラ』（南恵介氏との共著、フォーラム・A）など。

山辺恵理子 (やまべ・えりこ)

(都留文科大学講師、一般社団法人 REFLECT 理事)

1984年生まれ。東京都出身だが、アメリカ・ニューヨーク州で幼少期を過ごす。東京大学教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。2017年より都留文科大学文学部国際教育学科講師。専門は教育の倫理、教師教育学。主に教育者のリフレクションに注目して研究している。著書に、『リフレクション入門』（一般社団法人 REFLECT 編、学文社）、『ひとはもともとアクティブ・ラーナー！ 未来を育てる高校の授業づくり』（山辺恵理子・木村充・中原淳編著、北大路書房）など。

渡辺貴裕 (わたなべ・たかひろ)

(東京学芸大学教職大学院准教授)

1977年生まれ。専門は教育方法学、教師教育学。兵庫県出身。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。「学びの空間研究会」を主宰し、小中高の現場の先生方と共に、身体と空間の力、想像力を活かした授業について実践的に追究してきている。日本演劇教育連盟より演劇教育賞、全国大学国語教育学会より優秀論文賞、日本教育方法学会より研究奨励賞を受賞。著書として、『小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ 授業づくりの考え方』（くろしお出版）、『ドラマと学びの場』（共編著、晩成書房）、『戦後日本教育方法論史（上）』（共著、ミネルヴァ書房）など。



オープニング

渡辺 今日は、ほぼ定員いっぱいの方のみなさんに集まっていたけど、本当にありがとうございます。

今日の流れと趣旨を最初にお話ししておきます。最近ちょっとずつ教育界でも耳にするようになってきた「リフレクション」という言葉は、ざっくり言うところ、教師が専門職として成長していくとすると、自分の外にあるもの——誰かが言ったことや本に書いてあったりすること——を覚えることで変わっていくというのですね、自分が何らかの形で関わってきたものから学びを引き出して成長していくという発想をもつものです。その起きたことから学びを引き出すという営みのことを「リフレクション」と呼んでいます。

もちろん、こうした発想は以前からありましたし、リフレクションという言葉も使われてきたんですけども、この数年特に脚光を浴びて、この一月、二月だけでも、タイトルやサブタイトルに「リフレクション」という言葉が入ったこの三冊の本が刊行されるなど、一つの転機を迎えているのかなと思います。教師の学び方を巡

る一つの転機です。

ここで言うところの「かもしれないんですけど（笑）、春になったら書店の教育書コーナーに、「すぐに使える」とか銘打った本がいっぱい並ぶじゃないですか。あれももちろん意味があるし、そうした本にすぐる気持ちには、自分も授業をやる人間として身に染みて分かるんですけど、でも、あれだけではない教師の学び方を世に発信していく必要があると考えてきました。ですので、今回この三冊が出たのを契機にして、もともと互いに少しずつ面識があった、それぞれの著者である三人が集まって一緒に何かしようということを設定したのが、今回の企画になります。

本日の大きな流れですが、今行っているオープニングの趣旨説明のあと、それぞれの本の紹介を簡単に行います。著者から行うのではなく、他の二人から紹介する形でいきます。「自己紹介」ならぬ「他己紹介」というのがあったりしますが、そんなイメージです。

その後、用意してきた質問をめぐってトークを行います。「本書作成にいたった経緯は？」など複数用意してきているので、そのうちの一部になるかもしれません

が、これをお題にして、三人それぞれしゃべります。

最後は、「せっかくリフレクションのトークイベントなんだから、この場でもちよつとリフレクションをして、それをもとに質疑応答できるといいんじゃない？」という山辺さんからの提案を受けて、「プチリフレクション入り質疑応答」という形で考えています。

ということですが、早速ですが、それぞれの本の紹介にいきましようか。最初はこちらです。『リフレクション大全』ではお願いします。

他の二人によるそれぞれの書籍の紹介

『リフレクション大全』

山辺 最初に『リフレクション大全』のご紹介をしたいと思います。まずこの「授業づくりネットワーク」っていうのは、教育科学研究会とともに一九八八年にできた民間の教育団体がつくってきた、すごく歴史のある雑誌なんです。雑誌形態から本の形態に途中で変わりましたが、通巻で三三九号目として、そういう長い流れのなかで今回の『リフレクション大全』がつくられたということが、まず一点目です。

いらして、佐伯胖先生のリフレクション論から入るんですけど、とても短いカラーの対談なのに、読み解くの結構的な体力を使うんですね。そこで佐伯先生が何をとおっしゃってるのかっていうと、まず教師の世界、大人の世界には言語主義っていうのがあって、例えば教師だったら、ものすごくたくさんさんの報告書を書く仕事がある。その報告書に書くことにどんどん慣れていくと、「報告書に書けないような、何となくこんな感じとか、何か腑に落ちない感じとか、そういう知り方が閉ざされてしまいうんですよ」（四頁）と佐伯胖先生が語ってらっしゃいます。報告書に書ける言語だけが、認められる大人の言語とされて、それ以外がこぼれ落ちていつてらんじゃないか。そこで佐伯先生は「感じることの復権」（四頁）ということ提案されていて、何となくそういう感じとか、こういう印象を受けたとか、そういうことをもうちょっと大切にしていこう、っていう話をしていきます。そして大島先生と佐伯先生がたどり着くのが、「一人称の自覚」（五頁）、つまり自分の言葉で表現される、感情も知的な発見も全部含めた一人称の語りっていうのを大切にしていこう、それがリフレクションのでき

雑誌形態からきている本

なので毎回そうかもしれないんですけど、特に今回「大全」という題名が付いてるからか、より一層感じたのが、変な表現ですが、ミックスフライ定食みたいな本だなということです。

なんでそう思ったかというのと、確かにリフレクションというキーワードは共通する文章が並んでいるんだけど、この筆者が言っていることと、こっちの筆者が言っていることって本当に同じリフレクションの話してるのか

なっているんです。その答えは読者に委ねられてるんです。どのリフレクション論を自分は選択するかっていうのを読者に全て委ねて、ボンって目の前に出してくださってる感じ。ですので、かなり読者の力量に委ねられた本かなと思います。

ただ、出だしからもう流れがすごい。最初に学び論で著名な佐伯胖先生が、大島崇行先生と一緒に対談をして

ることなんじゃないかっていうことです。

そこから後は、実践報告などが続きます。例えば、リフレクションのツールとしては、ファシリテーション・グラフィック、ブログ、学級通信、ルーティン化して日記のようなものを書くとか、あとティーチング・ポートフォリオ・チャートとか、いろんなツールを使ったリフレクションのやり方が紹介されます。けれども、最後まで、出だしのこの対談で語られる「感じることの復権」と「一人称の自覚」がそのいろんなツールを通して本当に大切にできていますか、っていう問い掛けを受けるような、そういう本になっているかなと思います。その最初に投げられた問いが響き続けるような、ずしんと重く、満腹になる本だと思います。

渡辺 山辺さんに言い尽くされちゃったんですが（笑）、この本って、すごくこった煮だと思っんです。いろんなアプローチがある。リフレクションに使うメディアに関しても、グラフィックもあれば、ブログも紙皿も、もちろんノートを使ったものもある。でも、それって山辺さんの話にもあったように、裏を返すと、今までわれわれは、リフレクション、教師が自分のことを振り返るって



いう場合に、きちつと文章で書くというような言語的なメディアのみに、いかに縛られてきたのかっていうことだと思っんですよね。

だから、個々の記事だけでどうこうでなく、そうやって、ごった煮全体を通じて、言語主義じゃない、感じることに、そして一人称を大事にするようなリフレクションのあり方を提起する、そういう本になってるのかなっていうふうに、私も思っていました。

『リフレクション入門』

渡辺 次は『リフレクション入門』です。大きく言ってもこの本の特徴は二つあると思うんです。

一点目が、リフレクションっていつても、「省察的実践」のドナルド・ショーンといい、いくつかの系譜があるんですが、その系譜の中でも特にオランダのフレット・コルトハーヘンのリフレクションの捉え方および手法に焦点を当てて、それを分かりやすく解説しているということですよ。

コルトハーヘンに関しては、日本では二〇一〇年に出た『教師教育学』という本があるんです。あれはとても

で、具体例や事例がいっぱい盛り込まれていて、具体的にこういうふうなワークをやつてこんなことが起こつて、みたいなことが書かれています。

それらは、日本の文脈に即してコルトハーヘンの考え方を理解していくという点で、手掛かりになるかなと思います。例えば、村井先生が書かれている、大学でのゼミ開きのときに使うという、お互いのコア・クオリティーを浮き彫りにしてお互いのことを知っていくようなワークとか、すごくイメージが湧きやすくて、その意味でも、手に取りやすい本になるかなと思っています。

石川 この本の一番の強みは、もちろん教師教育学についてコルトハーヘンさんの論に付随して、その背景にあたる方々や書籍へのアクセスができるっていうことです。例えば、コルブだったり、ショーンだったり、それを一冊読もうとすると、われわれ現場教師には非常に骨が折れるわけです。でもこの本だと、入門と銘打つているとおりで、そうした方々の基本的な情報、立ち位置、これまでの経過、コルトハーヘンさんとの関わりみたいなものが、すっと手に入ります。そこがまず何よりもいいなあと思いました。それがまず一つです。

質の高い本なんですけど、ボリュームもあるし、レベルも高いし、あと結構値段も高いので、その意味では、この『リフレクション入門』が、特にリフレクションの発想とその具体的なやり方の部分を分かりやすく解説していて、手に取りやすくなって思います。同時に、『教師教育学』の時点では出ていなかったコルトハーヘンの考え方、特に「コア・リフレクション」について、より具体的には「コア・クオリティー」であったり「玉ねぎモデル」であったり、そうした部分を日本語できちんと解説している最初の本になるかと思っています。

二点目が、だからといって単にコルトハーヘンの理論の受け売りではなく、これを出されたREFLECTは五人のメンバーで四年にわたつて活動してきていて、コルトハーヘンの発想に基づいたリフレクションのワークを国内でもいっぱい展開されてきてるんですよね。なの



もう一つは、REFLECTというグループの五人の方々の主張の違いというか、丁寧に読んでいくと、やっぱり五者それぞれご自分の立つてらっしゃる場所や、リフレクションそのものに対する関わり方・考え方が異なるものが、ちよつとずつ違うんだなっていうことも見えてくるんです。多くの理解で言えば、リフレクションそのものが、ショーンを起源としてスタートはしているけれど、固まった概念であるというよりは、今もどんどん変わつていつているものなんだなと感じました。さらに、海外のものは訳語の問題もあるので、その辺りについても、本当は日々更新していかなくやいけないものなんだなっていうことも、読んでいつて分かりました。

『小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ

授業づくりの考え方』

石川 若い学び手の方々が、協同的なリフレクションを具体的にどんなふうに図つていくのかということが、さまざまな教科・事例を通して読み取つていける。ここがまず面白いですね。しかも、最初のページから最後のページまでステップの形を踏んで学んでいけるような形

になっているところが、一番の強みだと思います。

私の場合は、特に面白かったのはセッション7ですね。私の専門が国語だということもあるんですけど…。これは小四の国語の話し合いなんです。私は今年は関西の小学校現場に入ることが多かったんですが、あちらは学校の状況が、関東よりもさらに一段厳しいという印象です、子どもたちの状況も先生方の状況も。どんなことが起こるかという、まさにこの7のように、国語科の話し合いの活動でも、いつの間にか教科内容の話ではなくて、教材そのものと関わる生活の話や子ども同士の関わりの問題に、どんどん進んでいってしまうわけです。学習者も先生も、話す・聞くの技能について意識しながら進めていかなきゃいけないのに、困難な状況では、いつの間にか特別活動みたいになっていってしまう。

そうした場面を授業でも授業後の検討会でもたくさん見てきて、それをどうやって教科の問題としてリ



フレクションしていくんだろうというのは、僕自身の課題でもあるんですね。その時に、この7での過程は「そうか、こういう形でやっていくことでそこまで到達していける可能性が出てくるんだな」と思えるものでしたね。渡辺さん自身がもともと関西にいらした方なので、恐らく同じような現場を歩きながら感じてらっしゃったことなんだろうなというふうに思っていました。

山辺 私からも少しだけ補足させていただくと、渡辺さんが教職大学院で、こういう模擬授業を学生たちにしてもらって深い学びが生じるような授業をされてるっていうことは、例えば『リフレクション大全』に載っている渡辺さんの原稿とか、他の文献でも読めるんですよね。だけど、なかなか詳しく知る機会ってないので、「渡辺さんだからできるんでしょう」ってなりがちなんですけど、一冊全てをかけて、具体的に渡辺さんがどうやっているのかっていうコツを、背景にある理論と一緒に書いてくださったこの本を読ませてもらうと、少しは渡辺さんに近づけるんじゃないか、何かここから自分でも実践に移せることがあるんじゃないかっていう気持ちになることができました。

用意した質問をめぐってのトーク

本書作成にいたった経緯……

渡辺 ありがとうございます。すごくいいように言ってもらってうれしんですけど、ただ、この調子でいくと、三つの本の著者がそれぞれ互いの本を褒め合う会みたいなの、ちょっと気持ち悪い会みたいなのになるかもしれないので（笑）、これからお互いビバシとトークしていくことにしましょう。

用意した質問をめぐってのトーク、まず、本書作成に至った経緯、要するに本の舞台裏の部分ですね。どうやって、これの着想に至って、どういうふうに構成を考えたのかといった。誰からいきましようか。

石川 僕らの本は、もともと雑誌起源ということもあって、この「大全」一冊を手に入れていただくことで、とりあえずリフレクションに関わって現在起きている主要な様相みたいなものが、皆さんの手に入ればいいなっていうのが出版の際の願いなんです。学校に「振り返り」という名のリフレクションもどきみたいなものが強圧的に降りてきている問題があって、先生方自身が「そもそ

も振り返りってどうするんですか」「振り返りうんざりです」みたいなところで逡巡しているっていう現実があるんです。だから、そこに手が届くような本を作りたいっていうことは一つありました。

ただ、やっぱりなあと思うのは、アマゾンのレビューでも、「これは先生のためのリフレクションの本です」というコメントがついていて…。星は五つ付けてくれるんだけど。このあたりのところが、まさに、リフレクションが大きな広がりを持っていくためのポイントになってるかなと思います。授業の中でのリフレクションの問題と、先生自身がリフレクションするという問題とは、本質的には同系のものだと思うんだけど、現場の教員の中では見事に断絶しているところがあって、そこになかなか届かない現状があるんだな、ということは感じてはいます。

渡辺 授業の中でのリフレクションというのは、子どもが自分の学習活動を振り返るという意味での？

石川 そうですね、はい。そこでは当然、先生の人となりみたいなものが、リフレクションの形としても、学校、学級の中で機能していくわけで。だから、先生ご自

身がどんなリフレクションの強みを持つてらっしゃるかみたいなお話と地続きだと思っただけ。まず先に先生のリフレクションの問題を丁寧に考えると、順番で言えば必須だろうというふうに思うんだけど、なんかそこを一足飛びにして、「子どものリフレクション、どうするんですか」みたいな話に飛んでいってしまうんですね。そこにどういうふうにしたら手が届くのかなというのを思いながらでした。

山辺 じゃあ、いきます。『リフレクション入門』の作成にいたった経緯ですけど、コルトハーヘンのリフレクションの理論などを研究して興味を持って研修に参加したりしてきた大学教員の五人のメンバーで、二〇一五年に一般社団法人REFLECTというのをつくって、さまざまなワークショップをやってきました。リピーターになって何回もワークショップに来てくださる方もいて、とてもありがたいんですが、やっぱりワークショップで伝えられることには限界があるし、ワークショップの際に持ち帰ってもらって、後でゆっくり読んでもらえるようなものが欲しいという思いがありました。

また、コルトハーヘン先生はオランダ国籍ですが英語

「ん」みたいなものが多いじゃないですか。だって、現場で働きたてから授業づくりに困ったときに「あれ見よう！」ってなる人って、私は出会ったことがないんですよ。もっと意味のある、授業づくり、教育方法の本をって考えた場合に、こんなふうに事例と結び付けるやり方かどうか、というのが一つ出発点でした。

私はその後、東京学芸大学に移って、そこでこの模擬授業をベースにした取り組みを行うことになりました。それは「対話型模擬授業検討会」という形で大きく花開いて、昨年の教師教育学会でも院生らが実演して報告書にもなっているんですが、そんなふうに取り組みが発展するなかで見えてきたのは、模擬授業とその振り返りを結び付けてやっていくと、それは単に授業づくりのポイントを学べるというだけじゃなく、授業実践からの学び方、まさにリフレクションの仕方、それ自体をトレーニングしていけるということです。授業を考えると、こんなふうに学習者視点から見ることができて、それと教師の側のやりたかったことと突き合わせたらこういうふうな問題が浮かび上がってきて、といったリフレクションの仕方自体を、模擬授業と検討会という

がとても流暢な方なので、英語でたくさん出版をされているんですけど、英語で出版されているのになかなか日本語に訳されないところがあるって、現時点で先ほど見ていただいた『教師教育学』一冊しか日本語訳が出ていません。論文も英語で書いてらっしゃるけど、当然ながら現場の先生がそれらにアクセスして読むというののもつらいものがあると思うので、そういう研究の知見を少しでも届けたい、また、ワークショップに来られないような方にも届けられたらという思いもあって、では一冊、本を出してみようかっていう話になりました。

渡辺 私のほうは、本書の経緯、一部は本の中に書いているんですが、前任校の帝塚山大学のときに学生たちが模擬授業の勉強会っていうのをやってて、そこで私がちょこっとアドバイスや解説をしたりすると、正規の授業でやってるよりも、はるかに学生たちがスッと理解していったんですね。実際に模擬授業で起こった出来事と結び付けて授業づくりのポイントになるような部分を押さえると、スッと理解されていく。授業づくりに関する本、これも大きな声では言えませんが、特に大学で使われる「教育の方法と技術」みたいなテキストって、「うー

フォーマットを使って学んでいける。それが、学芸大に移ってから、強く感じるようになった部分です。

なので、これを書き始めたのは、帝塚山にいたとき、もう五年、六年以上前なんですけれども、その時書いていた部分と、学芸大に移ってから書いた部分とは、少しトーンの違いがあるんですね。事例と結び付けて授業づくりのポイントを押さえるっていう部分と、検討会での会話とかわたあめ先生からの投げかけとかを通してリフレクションの仕方を学んでいくっていう部分と、両方があるって、そのやりくりは結構難しかった部分でした。

自分の本の強みだと思う点

渡辺 次いってみますか。自分の本の強みだと思う点。実はこの質問、最初は入れてなくて、「本づくりで苦労したこと」とか「この本でできなかったこと」とかはあったんですが、昨日の晩、あらためて『リフレクション入門』を読み直していたとき、「強みのリフレクション」を目にして、「そっか、もっと強みの部分、ポジティブな部分にも焦点当てない」と思って、この質問

を設けました。

山辺 さっきの順番でいきます？

石川 いきまずか。先ほどからお話ししていますように、また、最初の紹介のところで山辺さんが喝破されているように、この本（『リフレクション大全』）の強みは、ごった煮だつてことですかね。いろんなものが総覧的に手に入る。ただし、そこから先を本当にやっていくとすると、これもさっき山辺さんから「渡辺さんの、本一冊分ないと難しいんだなと思った」っていうお話がありました。それぞれのものがそれぞれの背景を持っていて、ここから文献に当たっていかねればいけないし、現場のある方は何度も自分でやってみなきゃいけない。今回ののは、その入り口のための本です。入り口としては、本当にたくさんの方に手に取ってもらって、自画自賛ですけど、なかなかいい形のものできたなと思っています。

山辺 『リフレクション大全』、こんなにいろんな実践があるんだなっていうのを——自分も一章分だけ原稿を書かせていただきましたが——手に取ってすごく思いました。じゃあ、いいですか。

渡辺 ちなみに、REFLECTとしてコルトハーヘンさんのワークショップを受けたのはもう結構前というお話でしたけど、そのときにもっていたコルトハーヘン理解、リフレクション理解と、その後ずっとそうやってワークを経験されてきたうえでの現時点での理解とで、大きく変わった部分ってありますか？

山辺 今と当時で理解は全然違いますけど、今、そう聞かれてみると、主な違いは何なんだろうって思います。『教師教育学』は、いかに教師が授業を子どもの生活のリアルに即したものに改良していくかっていうテーマが中心で、その中でリフレクションの話も少ししてるっていう流れの本なんですよね。なので、授業改善やそうした授業を実践できる教員の養成っていうのが前面に出て、一種の教育の技みたいなのとのつながりでリフレクションが語られていた印象でした。だから、コルトハーヘンはそういう技法的なこと、コツに精通した先生という印象が最初がありました。けれども、九年間過ごしてみると、結局コルトハーヘンのしていることは、教師へのコーチングなのかなって思ってます。自分自身が何がしたいのか、何者になりたいのかっていうことをま

石川 どうぞ。

山辺 『リフレクション入門』の強みは、先ほどもおっしゃっていただいていたように、オランダのコルトハーヘンという、今リフレクションの方法論の研究では最前線にいる研究者の、日本語に訳されていない文献にある知見をたくさん盛り込めたっていうのが、第一の強みかなと思います。

もう一つは、二〇一〇年にコルトハーヘンが初来日をしてからほぼ九年になるんですけど、ずっとその九年間、この五人のメンバーは、コルトハーヘンの研修をじかに受け続けてきました。年に一回は会って何かしらやりとりを続けて、自分たちのワークショップへのダメ出しもらいながら育ててもらっています。そのような関係性があるので、正直、コルトハーヘンが英語の文献にも書けてない内容も盛り込めるんじゃないかなというふうに思っています。コルトハーヘン自身もこの九年間、理論を少しずつ改良していつてるわけなんですけど、二〇一九年現在のところのコルトハーヘンの最新版の理論に結構迫れているんじゃないかなと思っています。



ず教師自身が分かっているければ、子どもが何者で何を望んでいるのかっていうことにもセンチティブでいられないんじゃないか、というようなことを問うてるんじゃないかと思ってます。まずは教師のコーチングをしよう、教育の技法はそれぞれの先生によって違ってくるから、まずはその違いを見つめよう、というスタンスで教師教育に携わっている人なんだろうという理解です。

渡辺 なるほど。

石川 アジア圏の五人の先生が、九年間コルトハーヘンさんと関わり続けるっていうことで、コルトハーヘンさんにも実入りがあるんですよね。

渡辺 実入り？

石川 僕は今メンターとしていろんな学校の教員のところに入っているんですね。それで最近、一番得しているのは自分だなと思ってるんです。その経験から、コルト

ハーヘンさん自身が、山辺さんたちと関わっていくなかで、気付きが促されたり、新しいフェーズに進んだりするみたいなことってというのは、お話ししにくいかもしれないけど、きつとあるのではないかな、と。

渡辺 コルトハーヘンさんにとっては、東アジア圏の人たちと一緒にワークする、しかも継続的にワークするっていうのは、REFLECTが最初なんですかね。

山辺 REFLECTが最初です。アジアに拠点を置く人たちと連絡を取り続けているのも恐らくうちだけだと思います。アメリカだと南オレゴン大学というところにコルトハーヘン先生が入って、教員養成系の先生たちにリフレクションのワークショップを受けさせて、全員が学生たちのリフレクションを促せるようにしてるんですけど、アジア圏はうただけだと思います。実入りがあるのかは、ちょっと分からないですね。なんで付き合ってくれているのか、分からないですね。

ただ、研修を受けるたびに、コルトハーヘン先生も変わってる。ちょっと上から目線で言うと、成長してるよな。もう七〇になられるんですけど、それでも、本当にどんどん成長っていうか、変えられるんだなっていう

のを、毎回お会いして思ってます。

渡辺 なるほど。強みの話でしたが、私の本の場合、これは他の二冊と違って、一人で、しかも教師の実践のなかでも授業づくりっていうテーマに特化して書いたものなので、すごく具体的で、読んでいただいた方に「ああ、あるある！」っていう感覚を持ってもらいやすい本かなと思います。さっきの、教科内容と教材とを「こっちゃんにしよう」という問題にしても、あるいは、教師がバーってしゃべり過ぎてしまうという問題にしても、「分かてるけどついやっちゃう」というふうに感じてもらえる本かなと思います。それは一部には、実際に学生たちの間で起こったり振り返りで出たりしたもの、現場から出たものからとっているということもあります。そうした部分での共感は大にしたいなという思いがありました。

互いの本に関して面白かった点や尋ねてみたい点

渡辺 次、これいきましようか。「互いの本に関して面白かった点や尋ねてみたい点」。お互いに対話する形で進められたらいいかなって思います。

山辺 今お話しになった渡辺さんの本からいきいたいと思うんですけど、結構びっくりしたのが、セッション2の二七ページ。この本では「試みる」という節で模擬授業を行ったあと「かえりみる」「深める」「広げる」という

ステップを踏んで理解を深めていくんですけど、そのなかの「かえりみる」のステップ、まだ「わたあめ先生」という先生役が入らないで学生たち同士で模擬授業の振り返りをしているところで、リエコという子が、「今回もやっぱり、なんかずっと先生のペースで進んでる感じがした」って言うんですよ。

「試みる」のステップを読む限り結構うまくいったように見える授業なんですけど、この「かえりみる」の学生同士の会話で、ここまで突っ込んだ発言が出るっていうのがすごいなと思って。学生たちって、いいところをほめ合って傷つけ合うことを怖がるような傾向もあると思うので、そこそこうまくいったように見える授業だったらなおさら、「楽しかったです」とかで終わりそうなものを、「先生のペースで進んでる感じ」という鋭い突っ込みを入れるって、すごいなと思ったんですね。そういう発言がどうして出るのかなっていうのを、お聞き

したい。

渡辺 しかも、リエコは、この登場人物の中では比較的優等生キャラなんですよ（笑）。これはさっきの私の話とも関わっていて、一番最初にこの本の原稿を書いたときには、話し合いの部分で、学生たちがここまで率直に自分が感じたこと・考えたことをワットて出し合っているふうには、なってなかったんです。一番最初に私が書いたのが、最初の「物の重さ」のセッションだったんですけども、これ、六、七年前にそこを書いたときと、今回出版にあたってもう一回書き直したときとは、ちょっと変わってるんです。

どこが変わってるかというと、模擬授業が終わった後の振り返りの部分です。「かえりみる」の段階で、以前だったら、最初から、「これってこういうやり方したらどう？」みたいなのが多かったんですけど、それよりも、「私、こう感じた」っていうのを意識的に多く入れるようにしました。

それはなんでかという、今、学芸大の教職大学院でやってる対話型模擬授業検討会の取り組みで、まさに、そんなふうに学習者から自分が感じたことや自分の頭が

こういうふうに働いたっていうことをワートて出し合うことが、自分たちで深めるためのポイントを見いだしていくための大きな手掛かりになるんだなっていう感覚を、私もつかんだし、実際に学生たちもその感覚をつかんだからんですね。

最初はやっぱり、いいことを言おうとしちゃうんですよ。いいことっていうのは、ポジティブなっていう意味もあるし、あと、先生っぽいこと。「ここはこうしたほうがいいんじゃない？」みたいな。でも、そんな発言よりも、こんなふうに率直に、「こんな感じがした」とか「先生のペースで進んでる気がした」とか「こういうふうに面白かった」とかいったことを出し合うほうが、振り返りを深めていくことになるっていう。

それを学生たちが実際にやってきてくれたから、ここにこういうふうに書けるようになったっていうことはあります。

石川 山辺さんの的には、そういうのって起こりにくいっていうこと？

山辺 はい、すぐには難しそうだなと思います。もともと活きのいい子たちか、学生同士の関係性がよほど良い

かでない、難しいかなと。

石川 岸和田の朝陽小学校というところで、渡辺さんたちの仕事に学びながら、同じような形で校内研修を、僕、進めてるんですね。そうすると、さっきの山辺さんのお話を聞いてハッと思っただけで、それまでカチカチだった先生方がやっぱり同じような経過をたどりながらそういう種類の発言をできるようになっていくっていうのは、僕の実感としてありますね。

渡辺 最初はたいいてい、「感じたこと、考えたことをしゃべってください。そんなのを出し合いましょう」ってやってても、「私、生徒役としてこう感じました。だからこういう部分が良かったと思います」みたいに、結論めいたことを付け加えちゃうんですね。そうじゃなくて、「面白かった」とか「ここでこんな感じがした」とかでだけで発言が終われるようになるっていうことに、一つステップがある気はします。

石川 セッション7の小四の話し合い活動のことにこだわると、あそこで「あっ」っていうふうに思ったのは、やっぱり「深める」のところでの端的な促しとか、視点の切り出しとか難しいよなっていうことです。あそこで

は教科内容と教材というところがごちゃごちゃになってるところを、クリアに分けてみる視点を学習者に手渡して「もう少し話してみようか」となるわけです。ですが、これは現場では結構難しいだろうなと思ってたんですね。渡辺さんどうですかね。

渡辺 いや、そうだと思います。そこが多分この本の持ち味であり、一方、限界でもあると感じている部分なんです。こういうことかという、この本は、「こういう授業の仕方がいいですよ」と上から言われてそれに従うというのは異なる形という点では、今までのものからの転換だと思うんですけど、それでもまだ、「わたあめ先生」が降臨してきて、それなりに的を射た問いを投げ掛けてくれて、みたいな部分があると思うんですね。

読んだ人からも、「わたあめ先生が良くも悪しくも名人芸的」というふうに言われる。これは確かにそのとおりで、本来ならここはもっと「わたあめ先生」と学生たちとの対話で進んでいってほしいし、さらには学生たち同士の対話で進んでいってほしいし、実際、それはできると思うんです。でも、それを本にしようとした場合に、全部対話にすると読みにくいって言われたのも一つ

だし、また、まだそこを書くのが難しかったっていうのもあります。

今、実際にこういう学生たちの「かえりみる」のディスカッションがあった後に一言投げ掛けるとしたら、「わたあめ先生」みたいにポンッと問いを出しちゃうんじゃない、まずこういう質問から始めるかな、みたいな部分はいくつかあります。この本を活用した研修のときにもそれを使うことがあって、『わたあめ先生』はここです。上から降り掛かってきますけど、みなさんだったら、最初の一言、なんと言いますか？「みたいなのを尋ねたりしています。そんなことを通して、名人芸じゃないところ、自分たちで深めていけるところにもいけたらいいかな、みたいに考えてます。

山辺 一方で私は、「わたあめ先生」が名人芸を見せているからこそ、大学で教員養成などに携わってる人間が読むときはピリッとする感じがしました。大学で教員養成に携わる人に教員養成が専門ではない先生がとても多いなかで、その専門性も持たなきゃいけないっていう自覚を「わたあめ先生はこんなこと言えるんだ！」という気づきから得て、背筋を整えさせられる感じがしまし

た。

渡辺 なるほど。これに関連して、この『リフレクション大全』に関わることで一つ尋ねてみたい、投げ掛けてみたいと思っただけであって、それは、このなかで書かれてる高尾隆さんの部分なんです。九六頁からの「インプロではどのようなリフレクションをしているのか？」というもので、高尾隆さんというのは私の大学の同僚でもあるんですけども、インプロ、即興演劇をされてるんですよね。脚本があつて劇をするんじゃない、その場でパツと作っていくものです。それで、インプロではどのようなリフレクションをしているのか、インプロでプレーヤーとしてお客さんに向けて上演したあと、次につなげる、より良いものにしていくための振り返りをどのように行っているかということについて書かれてるんですけども、そこで非常に印象的なのは、できるだけ短くしゃべるということなんです。

例えば私が大学で模擬授業の検討会をする場合、模擬授業二〇分に対して検討会に三〇分以上かけたりしてるんですけど、高尾さんによると、インプロの場合は逆で、一時間、二時間の公演であつても、リフレクション

逆にそこで、言語的にあーだこーだというふうになっちゃうと、考えて動くということになってしまつて、インプロプレーヤーとしては通用しなくなる。多分この辺が、コルトハーヘンの場合でいう「ゲシュタルト」と関わってくるし、石川さんが最近研修でおっしゃっているという、「見れば変わる」という、言葉も大事だけどそこに頼り切るんじゃない、むしろ、見れば変わるようなものにちゃんと出会えるようにすることと、その大事さにつながるのかなと思つたんですが、いかがでしょうか。

石川 高尾さんの論については、僕にはとてもあれこれ言えるような見識はない（笑）。ただ、例えば、九州の中学校に入つたときのこと。荒れた学校です。理科の実験です。三年生、初任の先生が授業をやる。僕は後ろからビデオを回してるんですけど、一番前の女の子が太ももをむき出しにして椅子を支えてる横棒みたいな所に足を乗っけているみたいなのが起こるんですね。その映像を、学生さん半分、教員半分みたいな会場に持つて行つて見てもらうというふうなことをすると、例えば、先生方はみんな太ももを見ている、学生は誰一人太もも

は長くても一五分だそうなんです。それと、思ったまま、感じたままを言うというののもあつて、「今日こういう部分でちょっと動きにくかった」とか「ここでパツと動けた」とか、自分がどんなふうに感じたかを、パパツと出し合つて、そこで終わるそうなんです。それ以上のことは言わない。高尾さんいわく、この前ちよつと話してたんですけど、この『授業づくりの考え方』とかあるいは『リフレクション入門』のほうでも、言葉で掘り下げて問題を浮かび上がらせて考えていくということに重きを置いてるけれど、インプロの場合だと、それぞれがどう感じたかについていうのを浮き彫りに出した後は、プレーヤーが自分で感じれば良いと考えるそうなんです。『あのとき他の人はこういうふうに思つてたんだな』というのが分かつたら、あとはもう、それが自然に、自分の行動に反映されていくというふう



に気が付かない、なんてことが起こるんですね。つまり、さっきの高尾さんのことと言うと、まさに切り出してきて見せることで、自分のリフレクションの癖だったり、自分が今フォークラスしてしまいがちなところであつたりが、クリアになつていくつていうふうなことはある。だから、どこをどのように見せるかみたいなことは、すごく重要だろうと思います。

山辺 「見れば変わる」とか、出会いがあれば動ける、つていう話を聞いていて、話は逸れちゃうかもしれないんですが、それについて他者がどうしても必要なのかな？ と思ひ始めて。私、この『授業づくりの考え方』を読んでいて、模擬授業をしてフィードバックし合えるこんなコミュニティがあるって素敵だなと思う一方で、それが無い人は、これを読んだとき、ちよつと悲しくなるかなつていう気がしたんですよ。一方で、『リフレクション大全』を見ると、石川さんの「プログはリフレクションのツールになりうるのか？」という文章で、これはあんまりプラスじゃない答えで終わつてるんですが、個人でリフレクションするよりも、人に会つて生の会話が必要つていうことが書かれてるんですよ。

そうすると、やっぱり、個人で、そういう無意識とかのところにも目を向けて、自分が気付いていなかったことを自覚して言語化していくのってやっぱり無理なのかな、ということをはんやり考えていました。「感じることの復権」とセットで語られる「一人称の自覚」も、やはり他者があってこそ得られる自覚なのかも。

『リフレクション入門』でも、協働的にやるってことが前提になっちゃってるところがあるんですけど、どうなのかな、って思います。他者がいるからこそ無意識を自覚できるのか、自覚できた無意識を他者に伝えようと思うからこそ言語化できるのか、あるいは自分一人でもできるのか、どうなんだろうって思ってます。

渡辺 教育自体が本質的に共同的な営みというか、他者がいて成り立つ営みであるはずだけでも、案外、教師や教師を目指す学生が互いに共同的に学んでいくっていうのが難しいのかなっていう部分はありますよね。

石川 僕はいろんな学校に入っていて、ゴールは、先生方が自分である程度のリフレクションができることだよなと思ってるんですね。先生方は学校の中で結構孤立しているし、チームがつかれなくて苦労しているし…。

る取り組みでも、授業者と学習者で確かに立場は違うけど、そこが向かい合ってバチバチやり合うのではなしに、立場は違うけど同じ一つの目標に向かってアプローチしていく、というイメージがあるんです。なので、コア・リフレクションがもつ内へ内へっていうのはどういうふうに捉えたらいいのかなっていうのは、気になっていた部分でした。

山辺 今、言われて気付いたんですけど、コルトハーヘンの場合、同じ目標があるという前提じゃないんですね。同じ学校に勤めている先生たちも、それぞれ教科が別だったりして、違う教育観を持って違うゴールを子どもたちに設定している。違う目標に向かってる。だけど、大枠ではつながっているだろうという前提ですね。根底では、教師だから子どもの幸せとか共通の土台となる目的もあるだろうという前提はありつつも、でも具体的にその先生が言葉にする目標は、絶対に一人一人違うはずだと。その違いを自覚しないと、下手にぶつかっちゃうから、まずはそれぞれの先生が深く自分でリフレクションをして、「自分が究極的にこの子たちに成し遂げてあげたいことは何なんだろう」とか、「自分の教育

もちろんチームづくりも僕はお手伝いします。でも、主要には個人で呼んでいただいて、個人のリフレクションに一年間ずうっと付き合うみたいなことが多くて…。その先生がご自分でもある程度リフレクションできるようになることがゴールだとして、山辺さんのおっしゃるとおり、その道筋ってどういうふうにしていったらいいんだろうっていうことは、難しいなと感じています。

渡辺 私はその点について、『リフレクション入門』というコルトハーヘンさんの理論に関して気になった部分があつて、特に最近のコルトハーヘンは、コア・リフレクションのほうに振れていて、コア・リフレクションって、やはり自分の内面を掘り下げていくっていう指向性を強く持つてると思うんですね。もちろん「玉ねぎモデル」でも一番外の層では、外界とか環境と関わるわけですけども。でも、そうやって自己の内へ内へと向かっていくとなると、そのときに他者というのがどういう役割を果たすのか、極端に言えば、「リフレクションやるのは個々の責任」みたいな自己責任論になる恐れはないかなっていうのが気になりました。

この『授業づくりの考え方』でも私が大学院でやって

者としての目標は何だろう」とっていう自覚をしつかり持つこと。そうすれば、「私はこういうことを大切に思っているから、こうやってるんです」という説明ができ、分かり合える可能性が出てくるんだけど、それがなると、下手にぶつかったり気を使い過ぎたりでギクシャクした関係になるかもしれない。それを避けるためにも、まず、それぞれがしつかり自分でリフレクションするっていうことを、大切にしているのかなと思ってます。

渡辺 それで思い出したのですが、以前コルトハーヘンさんが来日されたときのワークショップで、ペアでお互いの実践に関して「八つの窓」だったかの技法を使ってリフレクションを補佐し合うようなワークをやったときのこと、すごく印象に残ってるんです。

私があるとき組んだ相手は、学校の先生ではなくアセッサーの方だったんです。アセッサーって分かります？ 企業とかで重役に昇進していく審査などのときに、自分が評価者だということは隠して、その会社の中に入っているか、その人のやるプロジェクトの中などに入っているか、その人が昇任に足る人物かどうかを査定するという仕事だそうですね。私にとっては、アセッサーとい

う仕事自体、その時初めて知ったんですが、だから仕事の中身とかよく分からないし、もちろん機密事項もいっぱいあるでしょうから、相手の方もそんなに中身はしゃべれないわけなんですよ。にもかかわらず、提示された技法を使って、問いを投げかけたり、出てきたものに対してさらに問いかけたりしていると、なんか本人の中では「ああ」みたいな気付きが促進されていくみたいなんです。

あれはすごく不思議な感覚で、こっちには、その人がやってる実践の中身はよく分からないけど、でもどうやら確かに何か促進している。むしろ、こっちが知らないからこそ、それができるのかもしれない。知っていたら、やっぱりつい何か、「こういうやり方、いいんじゃないですか」とか言いたくなっちゃうから。あの感覚はとても面白いし、そこにつながる話かなという気がしました。

できなかったこと……

渡辺 どうしましょか。（用意された質問のうち）是非これについてしゃべっておきたいというのがあれば。

いだから、とにかくたくさん提案を紹介したかったんですよね。四〇人の理事と学事出版の加藤愛さんで相談しながら、とにかく網羅的に。執筆の依頼は幸いほとんどのみなさんOKを出してくださったんです。けれども一方で、いや、僕らが見えていないものが恐らくあるだろうなとか。現場のなかで気が付いていない流れみたいなものがありそうだなとか。そういうものをもうちょっと拾っていききたいな、拾えればよかったなとか、そういうことはあります。

どうしても紙幅が決まっているわけですね、もともと雑誌形態からスタートしているの。「五年間かけて書きました、ちょっと厚くなるけど読んでください」みたいなことは、うちの本としては難しいわけです。ページ数の制約のなかでどうしても、載せたかったけれども載せられないというものもあったりします。山田洋一さんの、論理作文による互恵的リフレクションと



山辺 「できなかったこと」、しゃべります。

渡辺 じゃあ、「できなかったこと」、どうぞ。

山辺 強みと本当に表裏一体なんですけど、強みがコルトハーヘンの理論を紹介できたことだとすると、できなかったのは、というか私が個人的に思っているのは、いつかコルトハーヘンからも離れていかなきゃいけないということですね。

コルトハーヘンも、先ほどの話にもあったように、アジアの人との付き合いでは私たちが一番濃いくらいなので、日本の教育のことを分かってらっしゃるわけではない。本人も毎回、「日本の教育現場のことは分からないから、そこは自分たちで考えて」ということをおっしゃるんですよ。

だから、より日本の教育に即した理論や方法論の確立は、自分たちでやっていくしかないかなと思っています。この本の後半の実践例は、自分たちで今までつくってきたもので、半分やり始めたところではあるんですけど、もうちょっと理論的に、方法論になるような形でまとめていく必要があるのかなと思っています。

石川 『リフレクション大全』は「大全」と銘打つぐら

か、そういうお仕事も載せたかったな、と思ったりします。

渡辺 リフレクションって学校教育のほうでは最近ワーツと言われ出してきたけど、看護のほうではもうちょっと早くその重要性が言われてきていますし、そういういろんなところで起こっている動きとつながっていくというか、視野を広く持つていく必要はあるだろうなというのは、すごく感じます。

私の本に関して言うと、今回の本でできなかったことは、さっきお話ししていたこととすごく重なって、やはり、「わたあめ先生」がポンッて出てくる形になっているので、もっと実際に自分たちで話を深めていくというところにフォーカスしたいですね。実際に学生たちはそれをやっているの。どうやってそんなふうになっていくか、そこでの「わたあめ先生」の役割は、みたいなのは、今回扱えなかった部分です。

この本の原稿を教職大学院の院生らと読み合わせして、感想を出してもらったりもしたのですが、その時思わずうならされたのが、「この話し合い、面白いし、『分かる分かる！』ってなるけど、自分たちが検討会でやっ

てる話し合いのほうが、もっと授業者の思いを引き出し
たりしてるよね」というものでした。ですので、実際に
起きていることをすべてこの本に反映させられたわけでは
ありません。もっとも、この学生の感想は、本の限界
を示すものであると同時に、すごくうれしいものでもあり
ました。次は、もっと自分たちの対話によって深めて
いくっていうところに焦点を当てた本を作りたいなど
思っています。ちなみに、実際の学生たちの検討会の様
子は、さっき紹介した教師教育学会の企画でつくった報
告書に動画へのリンクを付けているので、そこから見る
ことができます。

プチリフレクション入り質疑応答タイム

渡辺 というところで、そろそろ「プチリフレクション
入り質疑応答タイム」にいきましょうか。山辺さん、お
願います。

山辺 はい。あと一〇分だということ。まず、もし可
能であれば、お手元に何も持たない状態をつくれればつ
くってください。もし無理だったら、居心地のいいと感
じられる状態で座っていただければ、何か持っても大

丈夫です。できれば、足をちょっと下ろしていただい
て、親指の付け根と小指の付け根と、かかとに三分の一
ずつになるように体重をかけるのが、一番健康にいい姿
勢らしいので、お尻と足の三点でも体重を分散させるよ
うに意識して座っていただけたらと思います。目をつ
ぶってくださいでも結構ですし、つぶりたくない方は、
そのままでも大丈夫です。一瞬だけ、リフレクションを
してみたいと思います。

まず、今朝起きてからここに来るまで、自分がやつ
たことを、さっと頭の中で思い出してみてください。朝
起きた瞬間から、何をしてきましたか。

(間)

山辺 ここにいたる午前中の間だけでも、結構いろんな
ことをされてきたんじゃないかなと思います。そして、
その中でいろんなことを考えていらしたんじゃないかと思
います。この慌ただしい日常の中で、あえてここに今
日来てくださったわけですから、こんな忙しい状況で、
「なんで自分はここに足を運ぼうと思ったんだっけ」っ
ていうのを、ちょっと思い出してみてください。

(間)

山辺 忙しかったけど時間をつくって来たのは、このた
めだなっていうのが思い出せたら、じゃあ、今のトー
ク、私たち三人の話を聞いていて、何を考えたか。どん
な思考が頭を巡ったか、少し思い出してみてください。

(間)

山辺 いろんなこと考えたかもしれないんですけど、
じゃあ、一回、その思考を横に流していただいて、次
に、どんなことを感じたか。身体的な感覚でもいいし、
感情でもいいので思い出してください。

(間)

山辺 わくわくポジティブな感情が湧いたかもしれない
し、ちょっと眠くなったりもしたかもしれないですけ
ど、それも一回、流していただいて。次に、何をしたい
と思いはじめたか、何が欲しいと思ったり、何を望み始め
たかっていうのを、振り返ってみてください。

もしかしたら、ずっと座りっぱなしだったのでもちよ
つと立ち上がって体を動かしたいなと思ってるかもしれな
いし。

(間)

山辺 それが終わったら、最初に思い出していただ

た、今日なんでここに来ようと思ったんだっけという
当初の自分の望みが、どれくらい叶ったかな、って考え
てみてください。

(間)

山辺 多分一〇〇パーセント叶ってる方は、いらつし
ゃらないんじゃないかと思うんです。じゃあどうしたら叶
うかなっていうのを、目を開きながらあらためて考えて
いただいて、最初に席に置かせていただいていた、ボー
ドにある紙に、「これと言っておけば少しは一〇〇パー
セントに近くなるかもしれない」「この問いを投げ掛け
ておけば一〇〇パーセントに近くなるかもしれない」っ
ていう言葉があれば、ぜひご記入ください。

(間)

山辺 ちなみに、質問出していたくこととか、ご意見
出していたくことは強制ではないので、言葉じゃない
んだよなっていう方は、書く必要はないです。

(間)

山辺 あと五分くらいなんですけど、今、書いてくだ
さった方のなかで、どうしても聞けななやつという人か
ら上げて見せてもらえますか？

参加者① 今日はとても素晴らしいセミナー、ありがとうございます。どうしても聞きたいこととして、「わたあめ先生」抜きで実際にやるときにポイントとなること、八つの質問、何を考えた・感じたとか以外に、これもやっという方がいいよというものを是非教えていただければと思います。来年度、新しい学年がスタートになったときに、実際にやってみたいという思いがあるのです。

渡辺 全く期待に添えない回答になっちゃうかもしれないんですけど、私が例えば大学院でやっていると、そんなに八つの質問——正確には九つの問い——に義理立てして順番にそれぞれのマスを埋めていくという形をとっているわけではないんですね。ワーッと出して、それを可視化するツールとして使って、抜けている部分があったら、「ちょっと、ここも聞いてみようか」とかしているぐらいで、べったりやってるわけではありません。むしろ、べったりやる、まずここを埋めて、ここ埋めてやってやることで失敗するというのを、今まで経験してきました。

ワーッと感じたままに言う、結論めいたことを言わず

ごくそれがいろんなところで注目され始めていて、それをつなぐものとかベースになるものって何なんだろうなっていうのを、疑問に思っています。一つには社会構成主義的な考えなのかなとも思っていて、そこもベースを知りたいなと思って。基礎となるところ、なぜそれが注目されて必要とされて効果が出ているのかっていうのを、お考えをお聞きしたいなと思っています。

山辺 ありがとうございます。一つは、多分、先行きが不明になってきている社会だからだと思っんですよね。あと、多様になってきていて、学校もいろんな人が入ってくる場になって、さっき高尾先生の話でも拳がった即興性っていうのがものすごく大切になってきます。

即興性が大切になるっていうことは、「わたあめ先生」が本の中で言ってたんですけど、「予想や実験を通して子どものなかに育てたいものは何だろう」っていう、授業の先の話ですよ。いろんなことがワシヤワシヤ起こるんだけど、「その一番先で子どもたちに育てたいことは何？」とか、「自分がしたいことは何？」っていうことを見通せてない。遠くを見通せてないと、ワシヤワシヤのなかでわけが分からなくなっちゃう世の中だから

に言いつばなしでOK、でもその言いつばなしのが、やらんで予期せぬつながり方をして、何かが見えてくるという、この感覚を生み出すことのほうが大事かなと思います。だから、その意味では、手法はおそらくできるだけシンプルなほうがよくて、それをやっていくなかで、「ああ今みたいな感覚かな」というように感覚をキャッチする、「深まるってこんな感じなのか」みたいにすることが大事なのかなという気がしています。

参加者② 今日はありがとうございます。まだあんまり言葉にできてないんですけど、リフレクションについて、なんかリフレクションだけで切り分けるのは違和感があつて…。

お話のなかで出てきたんですけど、リフレクションって、語りとか対話とかワークシヨップとか、そういうのとセツトになってるというか、切り離せないのかなと思っていて。教育にも最近、取り入れてきてますけど、さっき渡辺先生がおっしゃったように、心理とか看護、医療とか、あとは企業、大人の学びとかでもそういうのが同時多発的というか、最近じわじわと注目されている気がして、それってどうしてなのかな、ここにきてす

こそ、企業でも教育でも、リフレクションが大切になってきているのかなって思います。

渡辺 あと、集団で動いていくやり方として、一人が道筋を示していくというのは違う形、専門家がみんなを引っ張っていくべきいいというのは違う形の模索というのが、それこそ分野を問わず同時多発的に起こっています。中原淳先生の組織開発に関する本なども手掛かりになるのかなという気がしています。

石川 学校教育的に言うと、教科の枠組み自体が、経年変化で疲労骨折みたいになってるわけですよ。だから、それぞれの専門の人が自分の専門のコミュニティの中に閉じこもって、そこで使える論理を振りかざすだけでは、もうどこにも届かないと思うんです。みんなで少しずつ持ち寄って協同でお話ししていく必要があるというところに、学校もなっていかなくちゃいけないなあと思います。

渡辺 はい、こんなところでよろしいでしょうか。では、本日は「リフレクション（省察）で教師は育つ!」、三著の刊行記念セミナーにお越しいただき、どうもありがとうございました。

参加者のプチリフレクションシートより

感じることの復権

←→言語での深め

この矛盾は結局どうする？

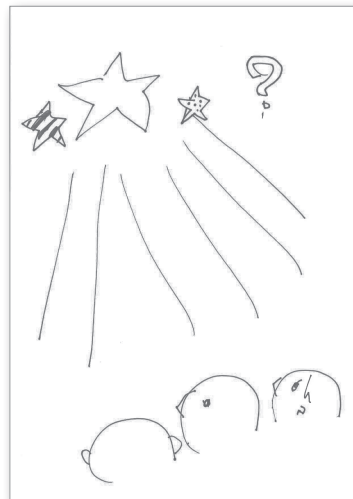
(そもそも矛盾しているのか?)

(初任者教員が) 学校で
協働的なリフレクション
の場をつくるにはどうす
ればいいのか?

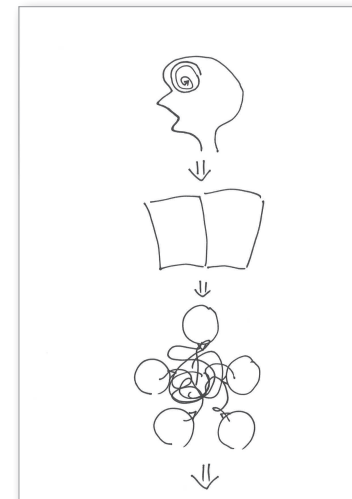
頭に浮かんできたことを
とにかくはきだす

子ども(学習者)のリフレクショ
ンと教師のリフレクションを同
じ地平の中につないでいくに
は?

→2つのリフレクションをつな
いでいくために教師教育者がで
きることは?



自分が何を知っていて
何を知らないと
思っているのかをクリアにす
る方法



教員養成・教員研修における
「リフレクション」の今求めら
れる役割・意味とは?
他領域(教育以外)における
「リフレクション」の位置づけ
と教育におけるそれとの異同

個人を深めるチーム作り

トークイベントを終えて

実務家教員という立場での参加がほくのポジションでもあり、最初から、お二人の優れた若手研究者のお話を間近に聴ける役得を楽しんでしようというスタンスでもありました。お二人ともこれまでに何度かお会いしていますが、本当に聡明！そして思慮深い。ほくは思いつきでぼんぼんしゃべってしまいがちなのです…。お二人の爽やかだけど重い言葉の数々に、横ですごいなあと思っていたというのが、正直なところです。出版社三社が同一テーマの書籍を持ち寄るというスタイルは新鮮でした。その形自体が「リフレクションの現場」の姿をしているというか、模しているというか…、そういう意味合いを示すことになっていたのかなというのは、イベント後に感じたことです。ありがとうございました。(石川晋)

今回のイベントで一番印象深かったのは、渡辺さんと石川さんの軽快さです。最後の質疑応答の中でも話しましたが、教育現場を含め、世の中はワジャワジャしていて複雑です。だからこそ、自分の向かおうとする道を見失わないようにするためには、渡辺さんの書籍の中に登場する「子どもの中に育てたいものは何だろう」といった長期的な視点での問いの探究が、極めて重要になります。お二人の軽快さは、この問いへの答えをしっかりとそれぞれの中に持っていることからくるのだと感じました。正直、別のメンバー、別の場だったら、とてもミクロな論争に終止してもおかしくないほど、スタンスが近いからこそそのズレが目につく三冊です。でも、三者が長期的なスパンで「教師や子どもの中に育てたい」と思っているものは、絶対に重なる。そのことが共通認識としてあるからこそ、こんなにもオープンに、軽快に、話せたのだと思います。リフレクションを通して、教師だけでなく、あらゆる人がこのような長期的な視点と軽快さを持って生きられるようになりますように。(山辺恵理子)

「リフレクション」という言葉は、きっとこれから学校現場でさらにメジャーになっていくのだと思います。けれども、おそらくそれと同時に、似て非なるものを「リフレクション」と呼んでその実施を求めるようなことも起こっていくのだと思います。事前に用意された項目リストにしたがって「できた」「できなかった」をチェックするだけ、といったような。もちろん、それに対して私は、「そうではない。本来リフレクションがもつ可能性は……」といったことを言っていかなければならないと考えていますが、私自身の「リフレクション」への捉え方にも、もちろん偏りがあります。今回のトークイベントは、私にとって、「リフレクション」を扱う他の二冊の本に関わったお二人とお話しさせていただくことで、「リフレクション」の多様性や共通部分をあらためて認識すると同時に、自分の「リフレクション」の捉え方やその偏りを見つめ直す機会にもなりました。(渡辺貴裕)

『リフレクション大全』『リフレクション入門』
『小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ 授業づくりの考え方』
刊行記念セミナー

リフレクション(省察)で教師は育つ! トークイベント記録

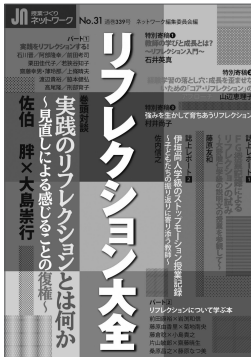
発行 2019年8月23日

著者 いしかわしん やまべ えりこ わたなべたかひろ
石川晋・山辺恵理子・渡辺貴裕

編集協力 加藤愛(学事出版)
落合絵理(学文社)
坂本麻美(くろしお出版)

発行所 株式会社くろしお出版
〒102-0084 東京都千代田区二番町4-3
TEL: 03-6261-2867 FAX: 03-6261-2879
URL: <http://www.9640.jp> e-mail: kurosio@9640.jp

書籍のご案内



リフレクション大全

授業づくりネットワーク No.31

ネットワーク編集委員会 [編]

グラフィック、ブログ、学級通信、ビデオ等のツール。多様なツールを使った実践と深くリフレクションするための理論で迫った号。

学事出版

1,600 円 + 税

A5 判 / 128 頁 / ISBN 978-4-7619-2393-8



リフレクション入門

一般社団法人

学び続ける教育者のための協会 (REFLECT) [編]

F. コルトハーヘン直伝の「リフレクション」を学ぶ。教育、看護、保育や企業の人材育成等、人が学ぶ様々な場面で活用可能な一冊。

学文社

2,000 円 + 税

B5 判 / 128 頁 / ISBN 978-4-7620-2849-6



授業づくりの考え方

小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ

渡辺貴裕 [著]

大学生の模擬授業 & 検討会と、わたあめ先生の物語を読むことで、よりよい授業づくりのための学び方、柔軟に授業を組み立てる考え方を学ぶ。

くろしお出版

2,000 円 + 税

A5 判 / 240 頁 / ISBN 978-4-87424-782-2

